御大典慶祝記念

人物列傳用

運命大觀

近藤白龍子著

坤　乾

瓦煎餅の元祖
龜井堂の代表
松井佐助君

◇彼は大阪の貧乏士族より出でゝ瓦餅煎を發案し、龜井堂の名と共に神戸の名物として知られた人物

艱難汝を玉に磨き上げた

温かい兩親の膝下や學校の窓から眺めた人間社會は、極めて單調無味で何事も意の如く行くやうに見へたが、さて愈〻人生の荒海に一足踏み出して見ると、人情世界には崎嶇峻坂が多く、鬼も居れば地獄もある。されば奸人は得て成功し、義人は常に不如意勝ちである。眞正の努力も時には疑はれ、尊ぶべき同情も却つて失敗の原因を招く事がある。然し一度此の人生行路の經驗から此の矛盾を發見した時には誰しも或は失望し或は憤慨し或は落膽し或は煩悶する。此の時人間は大方二つの途を辿る、一は此場合更に己れを勵まして此の矛盾を乘越へ行く内に漸く圭角が取れて圓滿な人と成る、俗に之を苦勞人と云ふ。今一つは斯うした場合大いに世を呪ひ人を怨み、人情の冷やかなるに憤慨して自暴自棄と成る、之を俗に拗ね者と云ふ。蓋し其の出發點は同じくして其の到着點には千里の差がある。此の如く人間が二樣に分れるのは抑も何故であらうか、其れは素より天性でもあるが一つは教育と境遇であり又一つは信仰と無信仰の爲めであらう。子供の時から己を責める事を教へられ若くは境遇が其の試練に適當であれば概して苦勞人に成るのであるが、自制や反省を教へぬ家庭に人と成り其の境遇に試練されないものは大概拗ね者に成つて了う。一度己れの意の如くならないと直に之を憤つたり又は之を銜んで反噬を試みる樣な性格の者には古來立身出世したものが一人も無いのである。打たれても擲かれても主人を慕ふ處に犬の可愛味がある、一度打てば再び懷かぬ爲めに猫は好まれぬ。秀吉は己を責めて信長に仕へ、光秀は人を責めて信長に銜んだ。一は天下を握り、一は自滅した。己を責める事を知らずして徒らに何事も人の所爲にする者は到底發達の出來ぬ性格である。

我が瓦煎餅の元祖龜井堂の代表松井佐助君は此の意味にて實に艱難汝を玉に磨き上げた人と云はねばならないのである。彼は安政二年卯歳の十一月三日大阪市生玉神社の傍らに貧乏士族として呱々の産聲

1855年

を擧げた人であるが、殊に家庭的に惠まれざる彼は、二歳にして嚴父の松井佐兵衞に死別れ、三歳にして慈母の阿秋に死別れ、まだ東西も分らぬ幼少時に大阪島町の叔母阿磯の手許に預けられた薄命なる人であつた。彼は七歳にして彼の親族中での資産家たりし大江吉兵衞と云へる藥店に丁稚奉公したが、十歳の時には育ての親である阿磯叔母に死別れて最早頼るべき者を全く失つてしまつた。然し彼は其の叔母の死際に「お前の先祖は士族で而も龜屋と呼はれし屋號の傳はりし舊家である今祖先の家を再興するものはお前より外に無いドウかお前の力で出世して呉れよ」との健げなる遺言を腦裡に刻み込み、深く考へた末に職人は喰ひハグレが無い將來職人に成ろうと決心し、遂に菓子の職人と成り一生懸命に立働いたのである。

彼は鈴木岩次郎君と成功を爭ふて神戸へ出て來た人である

天下の鈴木商店も先代の岩次郎時代は頗る貧弱であつた、何しろ明治五六年と云へば維新の大業漸く其緒に着いた頃で、アノ佐幕黨と勤王黨とが各所に火花を散らして爭ふた末に長州騷動あり西南戰役あり更に海外にては朝鮮騷動あり臺灣騷動ありで、實に平和風の柳引く暇とては無い頃であつた。此の頃から飄然二人の青年が神戸に乘込んで來た、即ち其の青年の一人鈴木岩次郎君は砂糖屋に奉公し、他の一人の青年たる彼れ松井佐助君は煎餅屋に奉公して互に成功を爭つたのである。處が一般の職人氣質は頗る金遣ひの荒つぽいもので、働いた賃銀は悉く飲食や遊興に飛散せしむるのが常なるに、彼等二人は一日も早く獨立事業を開きたい希望の爲めに、仲間より疎外せられ罵倒せられても平氣の平佐で一生懸命に立働き、軈て鈴木の岩さんは「辰の看板を掲げて砂糖商を始め、松井の佐助さんは僅に貯蓄した賃金を資本に明治十一年始めて貧弱な一小店を開いたのである。

斯くて彼は一方では自ら煎餅を燒きつゝ一方では之を商ふと云ふ風に晝夜兼行に立働き、我家に傳はりしと云ふ龜屋の家號を採つて龜井堂の看板を掲げたのが蓋し今日ある第一歩を築き上げたものと謂はねばならぬ。

明治二十三年偶ま第三回內國勤業博覽會の東京上野に開かれし頃は、彼も順潮に帆を捲き上げて居たので直に之に出品すると同時に支店を東京に開設し職人數名を同伴東上して瓦煎餅の賣出しを盛んに試みた事は、實に彼が敏捷な先見明を稱讃せねばならぬ。彼は此の東京支店にて非常の收獲を得た即ち千金を懷ろにして歸神したのである。

爾來長き歳月の間には、幾度か積極的店舗の擴張に災されて波瀾重疊を來たした事もある。或時は殆

ど閑店の止むなき悲境にも陥つた、或時は債鬼に責め立てられて再び立ち難きを思ふ逆境にも落込んだ其の起きては轉び、轉んでは起きつゝ所謂七轉び八起きの苦辛慘憺は迚も筆紙の盡し得る所では無いが然し根が苦勞人であり殊に松井家を再興する者はお前の外に誰も居らないと云はれし叔母の遺言が常に彼を刺戟したのである發奮さしたのである。而して彼が龜井堂の名を天下に轟かした所以、更に又彼をして益ゝ發奮さした所以のものは何んであるか、それは云ふ迄もない彼が各地の博覽會や品評會より受けたる賞牌褒章等が自然に物語つて居る。今之れを摘記すれば

○明治二十一年九月「カル、ス煎餅」に對し兵庫縣神戸區製產品評會より三等褒賞を授與。

○明治二十三年七月第三回內國勸業博覽會にては總裁大勳位貞愛親王より神戸瓦煎餅は品質尋常の比にあらず風味亦宜し頗る嘉すべしとの褒賞を賜り。

○明治二十五年五月聯合共進會に於ては海產煎餅に對し農商務大臣正三位勳二等河野敏鎌閣下より六等褒賞を授與せられ。

○明治二十六年の聯合共進會にては蝦煎餅に對し農商務大臣後藤象二郎閣下より四等褒賞を授與。

○明治二十八年七月第四回內國勸業博覽會では總裁大勳位彰仁親王殿下より鰕煎餅に對し三等褒賞を受け。

○明治二十九年には兵庫縣神戸市製產物品評會にては瓦煎餅に對し三等褒賞を受け。

○明治三十年の第二回水產博覽會に於ては海苔煎餅に對し總裁大勳位功二級彰仁親王殿下より三等褒章を頂き。

○明治三十六年七月第五回內國勸業博覽會にては煎餅新年海に對し大勳位功四級載仁親王殿下より褒賞を頂き。

○明治四十二年東京勸業博覽會にては古代瓦煎餅に對し東京府知事正三位勳一等男爵千家尊福閣下より褒賞を受け。

○明治四十三年大日本產業博覽會にては總裁從三位勳三等德久恒範閣下より有功一等金牌賞を受け。

○明治四十四年の全國食料品評會にては瓦煎餅アルフアベツトに對し總裁正五位勳四等肥塚龍閣下より一等金牌賞を受け。

○明治四十五年六月の山陰鐵道開通記念全國特產品博覽會にてはアルフアベツト煎餅に對し總裁伯爵大隈重信閣下より進步金牌賞を授與せられ。

○大正元年十月の神戸品評會に於て兵庫縣知事服部一三氏より一等賞金牌を授けられ。

○大正三年五月の御卽位記念帝國製產品共進會にては瓦煎餅に對し總裁正四位勳三等男爵武井守正閣

下より進歩金牌を授與せられ。

○大正三年七月の東京大正博覽會では謠曲煎餅に對し總裁載仁親王殿下より褒賞を賜り。

○大正四年十一月の御大典記念神戸博覽會にては大典記念煎餅に對し總裁兵庫縣知事服部一三、會長神戸市長鹿島房次郎諸氏の名を以て一等金牌賞を授けられた。

以上は凡べて松井佐助翁が龜井堂を代表しての出品に對し賞與せられたもので、其の賞讃を得る毎に彼は益〻發奮努力致〻として撓まず倦まず今や神戸市内の要所は勿論、各地の都市にも支店を設けて、天下に神戸龜井堂の煎餅を知らざる者なき迄に名聲を博した事は、是れ全く彼が這うした獻身的努力勉勵の賜として大いに稱讃せねばならぬ。

彼は神戸に於ける隱れたる社會奉仕家である

志ある者は其の身全しとかや、彼は叔母の遺訓を肝に銘して幾多の辛酸を嘗め盡くし、遂に汗と膏の結晶として數拾萬圓の資財を作り上げたのである。そこで彼は元町の龜井堂本店を養子の福三郎氏に一任し、更に多聞通の支店を親族の中島朝次郎氏に委ね、其の他各地に散在する支店出張所には夫れ〴〵忠實なる店員を主任として配置して自身は奥平野五の宮町に居を構へ病弱の靜養を爲す傍ら相談役顧問格にて常に指揮監督を怠らないのである。

然し彼は思へらく、人間は强い計りが男では無い、物質を作り上げた事のみが決して成功ではない。人間の價値は人情あり宗教心あり更に餘裕を備へて社會奉仕に努むべきである。是れ卽ち社會の一員としての果すべき義務であると云ふ。誠に慈悲慈愛の心が油然として湧き出でたのである。而して彼は今日龜井堂の盛大を來したのは全く市民諸彦を始め四方顧客の同情に依るもので、佛教の所謂お他力本願であると云ふ感念よりして、養子其の他の親族に夫れ〴〵資財を分與すると共に各所へ淨財を寄附する事を惜まなかつた。今記者の知る所のみを列記しても、本派本願寺の別格別院たる善福寺へ金壹萬圓也の筆頭に、各地の神社佛閣に對し數萬圓の寄進を爲し、近くは乃木神社に參千八百圓を寄附し、或は御大典記念として大理石の大鳥居を三宮神社へ建立し、或は市の社會課を經て貧民部落や兒童保育所へ食料品や金錢を施與する等、其の他の公共事業に寄與することを怠らないのである。

彼は最初鈴木岩次郎氏と共に神戸に來り鈴木氏が積極主義に進む事に反して彼は常に運鈍根であつた殊に鈴木氏が投機的事業に手を染むるに反して、彼は石橋を叩いて渡る的の穩健主義で而も一人一業主義を執つたのである、卽ち瓦煎餅に全生命を捧げて品質改善に沒頭し、遂に瓦煎餅の元祖龜井堂の地盤を築き上げた事は、彼を立志傳中の一人として御大典記念の人物史に納めし所以である。